

知的障害児の地域社会とのつながりをめざす授業づくり

～ 公共交通機関の利用から考える ～

○竹川 久美子 吉岡 学

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校

KEYWORD：知的障害、地域社会、公共交通機関

(目的)

本校では、小学部段階から社会とのつながりを重視し、授業づくりに取り組んできた。児童が地域社会とつながりを持つためには、公共交通機関の利用が必要と考えられる。しかしながら、本校の児童は通学や放課後の支援施設へ移動する際、保護者や施設の支援員が同伴して「スクールバス」または「自家用車」で移動しており、公共交通機関を利用していないのが現状である。このような点から本実践では「公共交通機関の利用」を地域社会へつながるための育成すべき資質・能力とし、児童が公共交通機関の利用に対して興味・関心を持ち、主体的に学び、親しみが持てる授業づくりを目的とした。

(方法)

本実践の教材は、児童が憧れを抱いている北陸新幹線乗車を取り上げた。対象教科は、生活単元学習とした。授業展開は、乗車のための利用行動を細分化し、項目ごとに学習を行い、その後、各項目をつなぎ合わせた一連の学習をおこなった。対象児は小学部1年生から4年生まで各学年3名、計12名（内男子5名、女子7名）である。

(結果)

(1) 乗車に対する理解と期待感（授業の導入）

本物の北陸新幹線の映像を見た後、自作の新幹線パネル（児童が好きなしかけ絵本のようにパネルを開くと新幹線の座席が現れるようになっている）に児童が自分の写真を座席に貼りつけるといった活動を行った。児童は自ら自分の写真をみつけ、うれしそうに座席に貼りつけていた。教師は、児童が自ら活動したいという気持ちを出してほしいと願い、この気持ちを受け止めることを大切にされた。児童を待たせて一人ずつ貼らせるのではなく、貼りたい児童全員が一斉に写真を選び、好きな座席を選んで貼れるようにした。使用した写真は、各個人の好みに合う色や形の洋服のイラストにし、写真サイズは児童が持ちやすい大きさにした。そうすることで、児童が自分の写真を選ぶ際には、自然と他児と一緒に楽しい雰囲気を選ぶ様子が伺えた。

(2) 自動改札機の利用スキル学習

新幹線乗車の際には、乗車券と特急券の2枚を自動改札機に通す必要があり、乗車時は出てきた券を取り、降車時は券が出てこないため取らなくてよい。この仕組みの理解と券の扱いが難しいのではと考え次のように取り組んだ。

実際の券と同じような教材を製作し、2枚必要だということを繰り返し伝えた。また、駅で教師が自動改札機を利用する様子を撮影した動画を提示することで、児童は集中して見ることができた。

(3) 一連の乗車疑似体験

乗車方法の理解をねらい、区切って個々に学習するのではなく、実際に新幹線に乗るときと同じ一連の活動を疑似体験できる授業を展開した。校内の会議室を新幹線、2階を新幹線ホームに見立て階段を上がる、移動しながら連続した乗車体験を行った。自動改札機の模型を作り、改札口を設置し切符の取り扱いの体験もできるようにした。

さらに、乗車への期待感の向上をねらい、新幹線に乗車しているような体験活動を行った。新幹線に見立てた会議室に、椅子を新幹線と同じ配置で並べ座席とし、プロジェクターとスクリーンを3台使用して車窓からの映像をフロント・両サイドに映し出した。（新幹線乗車バーチャル体験）

移動を伴う乗車体験を実施したが、児童は各場所ですっきりとMTの話を聞き、皆と一緒に移動し活動できた。会議室前に設置した新幹線の扉が開くと、児童は目を輝かせて中に入り座席に着き車窓の映像を興味深く見ていた。

(4) ICTを使ったアクティブラーニング

児童が授業の振り返りができることをねらって、授業で使った動画をiPadに載せて教室前の掲示板に設置した。児童が一人で簡単に操作できるようフリーの動画再生ソフト『まねるんです』を使用した。その結果、児童は、教師の支援を受けることなく見たい動画を自ら選んで繰り返し見て、必要な情報を取り込む経験ができた。

(考察)

知的障害児は興味・関心が持ちにくく、授業に集中することが難しい。今回の授業の導入時では、理解してほしい事柄を、児童にわかりやすい映像と絵本（パネル）で提示し、見る・聞くという受動的な学習活動だけでなく、児童が自ら写真を選択しパネルに貼るといった能動的な学習活動を加えることで、児童の学習に対する期待感を高め、児童自身が公共交通機関を利用するという理解を促すことができたものと思われる。また、教師が児童の活動したい気持ちを尊重する支援を行ったことで、児童は授業に集中し、興味・関心を持って主体的に学ぶことができるようになったものと考えられる。

また、実際の乗車では、どの児童も笑顔で乗車し、自動改札機の利用をほぼ一人ででき、駅構内を楽しそうに歩く様子が見られ、本実践が公共交通機関に親しみ地域社会とつながる第一歩となったものと考えられる。

なお、本研究は財団法人交通エコロジー・モビリティ研究助成により行われた。

OKUMIKO TAKEGAWA, MANABU YOSHIOKA